
異世界情報屋になったぜ！

桜 狂歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界情報屋になつたぜ！

【NZコード】

N4710Z

【作者名】

桜狂歌

【あらすじ】

神のミスで死んだ主人公がいろんなアニメの世界へ行き異世界情報屋になるお話です。ついでに言うと何でもありな主人公です。初作品ですが、温かく見守ってください。

オリ主紹介（前書き）

作者「記念的な第1話を読んでください」

オリ主紹介

名前
藍雷 らんらい

咲夜 さくや

愛称

咲夜、サツキー

性別

女（勘違いで男と思われる事も多々）

年齢
10歳

性格

普段はのんびりしていて、時々ロードのように見える事も多々ある
多重人格でイノセンスや鍊金術を使うと別人になる
意外とキレやすい

好きな物

アイス、肉、女の子（特に可愛い子）、子熊（白い感じの）

嫌いな物

喧嘩を売つてくる奴、悪党、自慢話ばかりな奴、面白くない人
気に入らない人

容姿

見た目はハガレンのワインリイに近い（髪は黒、腰辺りまでのスト
レート）

髪はいつもポニーテイル、何故かゴーグル着用、目は透き通った青色

服装

黒のミニスカに胸の辺りがすごく開いてる露出度の高い服、黒の口
ングコート

二つ目

評議員や表社会からは、白黒情報屋

いつも、表社会の情報や裏社会の情報を持っているから
闇ギルドなどの裏社会からは、多重人格の魔王
戦闘で鍊金術やイノセンスを使うと別人格になるから

強さ

判定不可能

能力（技や魔法なども・・・）
オールパークエクト

異常全知全能

過負荷 大嘘つき（オールフィクション）
スカーテッド

致死武器

ラフレシア

荒廃した廢花

イノセンス 寄生型で目と喉、装備型で刀を所持
発動時の能力はのちに紹介

ノアのメモリー 始まりのノア 時空のメモリー

ティキの快樂のメモリー

ロードの夢のメモリー

鍊金術 呼び名「創造の鍊金術師」

ある人の許可が出ればなんでも作るから

魔法 風の魔法

星の滅竜魔道師 星を使った滅竜魔法ができます

星を使うので、魔法がキラキラしています
後に追加していきます。

口癖（一人称）

普段は「僕」で怒った時などに「俺」になる
ちなみにキレると完全に男みたいな発言になる

相棒（てか執事？）

名前

アキ・フュース（咲夜に義兄にされている）

年齢

?歳（年齢不詳）

性格

誰に対しても親切で優しい、だが咲夜を傷つけられると、キレて悪魔の力を發揮してしまう

普段はまつたくもって温厚な人である（咲夜を傷つけられることが多いから）

好きな物

主人である咲夜、子熊（咲夜と同じ）

嫌いな物

咲夜を馬鹿にしたり怪我をさせる奴、悪党

容姿

簡単に言つて顔立ちがハガレンのマスタング大佐なだけで
あとは黒執事のセバスチャン達と同じ

口癖

稀に了解した時などの返事が「イエス マイ レディ」になる

普段だと「かしこまりました。お嬢様」である

オリ主紹介（後書き）

さつそく長かつたっすね。まあ、がんばってやつていただきたいと思ひます。

もつすぐ冬休みですし、がんがんやつていきたいです。

追記

原作のキャラ達は使いますが、原作にそつてお話が進むかはまったくもつてわかりません（思いつきがあるからです）

プロローグ（前書き）

新たなる情報屋が今ここに生まれる

つて、なんかありきたりな気がすんだけど……

プロローグ

「あいやいや…」にはあぢー?.

ただいま僕は真っ白な空間で座っていた

「ふむ、死んじゃったパターンだね!しかも神様のミスとか!」

「へえ、理解が早くて助かるよ君」

「誰かのお?」

「ミスで君をやってしまった神様ですが、なんでそんな年寄り系?..」

あ、気づいたかつてか、今神様って言つた?

「うん言つたよ」

「おこ、地の文に返答出すなよ」

「あ、」めん

素直な神様だねいろんな意味で・・・ブフツ
と内心で笑つていた少女

「今のはスルーしてあげようか」

よつしやー・やつぱ素直だな

「そんなことよつ、本題に入るよ」

「どうぞどうぞ」

「わざわざ言つたとおり俺のミスで君は死んだから別世界へ行つて
ね」

「別世界だとおおおおおおおお?..」

(何この子、すっげえ過剰反応なんだけど……)

反応に驚いていた神だったが少しずつ後ろへ退いていた

「それでね、君には別世界行くついでに特例で異世界情報屋になつてもらいます」

「え、何それ？ てか、何で僕なの？」

「いやあ、ちゅうじ良こところに俺のミスで君が来たからさあ

うわあ、この神せこいよ、ちょうど来たからつて
絶賛、神に対する文句を放つ少女であった

「そんで、一番最初の世界は決まつてないから

「え、じゃあ、どこ行くかわからないパターン？！」

「そゆことだね、ついでに言つと特例で情報屋やつてもいいから、
異世界飛び回るための

能力だけ俺からのプレゼントね

「あ、よっしゃー！」

ん？ 待てよそいつこいつ能力って期間とかあんの？

「それに関しては心配い無用」

「また、地の文つつこんだし」

「ま、い、よ、で能力とか容姿についてだけど……」

「お、ねー、まず見た目はハガレンのワインリイ似で田は青、髪は
黒で腰の辺りまでのストレーー」「

容姿だけでいろいろ注文する少女

「す、いね、いろんな意味で」

「服装については、露出度の高い服でね、それと黒い服はぜつたい
十着以上はなきやね」

「そんなに黒いのいるのー?」

「あたりまえでしょ、僕黒が好きなんだから」

「それと、黒のロングコートは絶対ね」

「わかりましたあー」

まったく、曖昧な返事だなあ

「さて、能力は?」

「えつと、めだかボックスの過負荷^{スカーテック}で大嘘つき（オールフィクション）と致死武器と荒廃した廢花ね^{マイナスラフレシア}」

「過負荷でそんな付けるのか」

「異常は全知全能ね^{アブノーマルオールバーフェクト}」

「全知全能?」

「そう、めだかは完成つ^{ジ・エンド}ていうので本来の持ち主よりも完成された状態で十分に使うものでしょ?」

「うーん、そうだね」

「で、僕の言う全知全能は持ち主の能力を十分に使うのではなく、十全に使うんだよ」

「へー、そりゃあすこいやー!」

オリジナルにしちゃす」しきぎたかな?

「ほかには?」

「そうだね、Dグレで「イノセンス」ね」

「装備型? 寄生型?」

「えつと、目と喉に寄生型のイノセンスで、装備型のイノセンスを刀の形で頂戴な」

「え、寄生型と装備型で、計3つもイノセンスを持つの?」

「だめなわけ? 後、ノアのメモリーでオリジナルの始まりのノアとして時空のメモリーね」

「まだあんの！」

「それとティキの快樂のメモリーとロードの夢のメモリーねへへ」

少女の表情にはうつすら青筋が見えた

さすがの神様でも少女の圧力には負けてしまうのである

「ほかにあるの・・・ですか？」

「アーティストの仕事は？」

「さあ、金工の鍛冶屋さんへ行こう。」

「そう、いろんなものを作れるの・・・人体鍊成以外ならなんでも一

そして少女は少し悲しげな表情で言った

「わ、わかつたよ創造の鍊金術ね」

「此はアーバ星の行は威靈也」

「うん、僕ね滅竜魔道師になりたかつたんだ」「風はねがたたか星の方は滅竜魔法なんだね」ドラゴンスレイヤー

「アーリーがハーモニカの音を

「もう少しじとか（苦笑）」

あー、他の能力どうしようかな今言つても神様困るか

「あ、そこについてはノープロブレムだよ
「またしても、地の文つっこむし、ひらがな英語だし
「そんな言わないで傷つくなよ・・・」
「あ、ごめん、そのとこ気づかなかつた
「ま、ノープロブレムなわけだ」

また、ひらがな英語でか、なんど？

「君が別世界へ行つても情報などをこちらへ送るため、テレパシーや通信機をまたしても俺からプレゼントだ！」

「おお、神様太っ腹ー」「やつだらうそうだらう、もつと俺を褒めたたえりー」

あーすゞこすゞこすゞ神様すー（めちゃくちゃ棒読み）

「ひでえ、言い方が雑すぎるしかも口に出して言わなこし（泣）
「ま、これで困らないね
「もつ、かなえてほしいことは無いねー！
「いや最後に一つね
「ええーー！」

なんだよまだ文句あんのかよ あ、あ、?
口には出さないが表情で、また出していたのであつた
それを見た神は

（ヒイイイイイイイイ、せつぱんじいええよ、何なんだあの嬢ちゃんよ
お、圧力ハンパな過ぎだー）

またしても、圧力で負けておびえている神である

「最後は、僕に執事をくれ！」

「え、執事つすか？」

「そう、執事よ。執事つて何かと役にたつでしょ？」

「それもそうだね。で、普通の執事それとも悪魔？神？天使？」

「悪魔でお願いね。顔立ちはハガレンのマスタング大佐みたいなので、あとは黒執事のクロード達とかと一緒にね」

「わかったよ。名前は君が付けてあげる？」

「そうね、そうするわ」

さて、名前か、何が良いかな。あーあれでいいか

「ならせ、僕のお兄ちゃんだったアキ・フュースでいいよ
「何その名前、外人？」

「ハーフだったのよ、生まれたのが外国だったから
「へえー、そうなんだあ。え、じゃあ君もハーフ？」

「一応そういうわね」

「じゃあ、君のお兄さんって設定あげようか？」

「それはやめて。でも、義兄という事でならいいわ

「OK。執事は向こうに行つたら会えるからさ。じゃ、これでいい
ね？」

うーん、うん他になーいな

(はあ、よかつたあ)

やっと終わつて安心していた神様でした

「それじゃ、向こうについたら、手紙と情報と服一式やらなんやら送つておいたから。それと行く場所はすべて君の行きたい所だから、

君も原作知識はあるといふに行へと迷つむ
「それって、思つよの話しどじょーへ。」

あ、どうせだからあれにてまでも叫つか

「ねえ、神様よお」

「何や?」

「今前とかつてどうなるの?..」

「じゃあ、こん中から選んでよ」

そういうとさうじと細かい文字がたくさん並んだ

「いっぽいだな、つか、細けえな。よしつ、これこいつと
「ん、何々、藍雷^{らんらい} 咲夜^{さくや}かあ」

「意味は、藍色の雷が鳴る夜に咲き誇れといつ感じです
「へえ、なんかすごいね」

んじや、行くかあ

「君は特例なので、落とさずこの扉を通り行つてもいいわ
「お、特例だから落としまぬしか、よかつたあ
「そんじやこいつてらつをーー」

ギィーーー　　ドンッ

扉のドアが開いた途端に神が咲夜の背中を押した

「てめ、神! 何すんだこの野郎!」
「さつあと行けつてんだよ(態度豹変)
「こいつがー! 次会つまで俺のこと覚えておきやがれーーー
!...!」

さけびながら異世界に飛ばされる咲夜なのでした
され、特例の異世界情報屋がいろんな世界でやつていけるのか

「やつていけりあ（怒）！」

次回へ続くのであった

「ちよ、待て、俺の文句はまだ終わって……」

プロローグ（後書き）

はあ、こんなんでやつていけるだらうか
ま、行き当たりばったりなお話しだから問題ないか（ありありだろ）

てかせ、イノセンスほしいなあ（作者の願望）

「ル・マリエテイル?」（前書き）

まずは、フュアリーテイルから行ってみようかな

「おわっ」と「とつとつ」。あ！」

ズサ――――――ドカン

到着そうそうでバランスを崩し転ぶ咲夜

「あたたた、いつてえーなあもつ！」

「大丈夫ですかお嬢様！」

到着したそこには執事であるアキ・フュースが立っていた

「ん？ ああ、アキか」

「お初にお目にかかります、お嬢様」

「自己紹介はしなくていいからね」

「わかつております。私はあなた様に作られた存在ですから

実際は神が生み出したんだけどな

自分がくれと言ったのをすでに忘れていた咲夜だった

「ま、んなこたあどうでもいいよ、といつかこじどい？」

「えーっとですねえ。あ、そういうえばここにお手紙が・・・

「かして！」

咲夜ちゃんへ

今頃は到着そうそう転んでいるのである（なんで分かるんだよ）

そんな君に教えます。まず最初の世界はフェアリー・テイルだよ。ついでに言うと原作開始の一週間前なんできくつとフェアリー・テイ

ルに入つて

ギルド所属してくれない？そこで原作関係の人達と行動して情報集めをしてちょ

まあ、軽い情報はここに付けとくからね第一の人生楽しんでね～

「うう、この髪は君が読み終わる頃に爆発するからね（あのときの暴言のお返しだー）」

「おれましたか！？」

「アリミノニ」

力サ力サ
ピュ―――

予想外な事に風が吹いてきて勝手に飛んでしまった

ボッカニーニ

そして飛んでいつたと思った途端に爆発をしてしまい、少し近かつたせいか咲夜は爆風に飛ばされてしまった

「あ、せせああああああああ」

「お、お嬢様！？」

アギー＝＝＝助にてテ＝

卷之三

そこでアキは何かに気づいた様子

「お嬢様！その方角はフェアリー・テイルのある場所なのでそのまま

飛んでいってください！」

「ええええ、そんなんああああああああああ

ところわけで、咲夜はフェアリーテイルのほうへ飛んでいったので助けてもらひましたができませんでした

～～数分後～～

絶賛、落下中の咲夜

しかもフェアリーテイルの真上

その頃の咲夜とフェアリーテイルの人達

ひやああああああああああああ

「ん？なんだここの声？」

「どうしたナツ？」

「いや、どつかから叫び声がした気が・・・」

「そりや、ねえーだろ」「

「あん？俺を馬鹿にしてんのか！」

「てめえ、こそ俺のこと馬鹿にしてんだろ！」

「んだとおー！」

「今日こそ決着つけんぞー！」

いつものようにナツとグレイの喧嘩が始まつた
だがその日は少し違つた

「ちょ、そこに居る人達どうてえええええ
「え？？」

ヒュ――――――ズッドーン

ちゅうじ良じ感じに咲夜はナツとグレイの喧嘩している所に落ちて

しました

そして、ちょうどアキも着いたことであつた

「いててて

「あ、お嬢様大丈夫でしたか」

「ちょっとお！なんでここに来るからって助けないわけえ！？」

「すいませんでした。この方が手つ取り早かつたので

「まったくもう！」

「それよりお嬢様？」

「なによ

「そろそろどいてあげては？」

「えつ？」

フガフガフガア―― ジタバタジタバタ
咲夜に下敷きにされている一人はあはれていた

「あ、やばっ、ごめんねお一人さん、気づかなかつたわ」「いつてえー、ん？誰だお前？」

「みねえ顔だなあ？」

「あ、初めまして僕、藍雷咲夜といいます」

「さ、さくた？」

「咲夜だろうが！」

「そんぐらい俺にもわかる！」

「嘘付け！」

「なんだとお！」

咲夜の名前からまたしても一人の喧嘩が始まってしまった

(「おー人は仲がよいのでしょうか？」)

まったくもってどうでもいいことを考えていましたアキでした

「「ひつ、 やめんか一人ともー。」

ゴンッ

「「 いだつー?」」

「あ、 あなたは! ?」

「ん? 君はいつたい誰だ?」

「僕は藍雷咲夜といいます。咲夜と呼んで下さいー。」

「 そりか、 私」

「 妖精女王のエルザ・スカーレットさんですよね!!」

「あ、 ああ、 そうだ。私も人気になつたものだな」

この人つて自意識過剰なの?

「して、 君はここに何か用なのか?」

「あ、 はいっ。僕このフュアリー・テイルに入りました!」「おお、 そうだったのか。すまなかつたなうちの二人が迷惑をかけたようで」

「いえいえ、 ゼンゼン迷惑なんて(逆に僕が迷惑かけた気がする...)大丈夫ですよ」

「 そうか、 ではマスターに紹介してやろ」

「あ、 お願いします。行こうアキ」

「かしこまりました」

そして、 エルザに連れられてマスターの元へ行つたのであった
更に、 マスターの元へ行くまで周りの者達が

(なあ、 アイツ見ない顔だけど新人?)

(わうじやねえのか?)

(へえーべつひんさんだなあ)

(後ろの男は何だ?)

(あの子のボディガードか?)

(ええっ、それだったら近づけないじゃねえか!)

などとこう会話をひそひそしていたのであった
そんなこんなでマスターの元に着いた

「マスターこの者が入りたいと言つのですが・・・」

「いやつは?」

「はい、ナツとグレイが外で喧嘩をしている時に空から降ってきて
フェアリー・テイルに入りたいと、それと彼女の名前は藍雷咲夜とい
うそうです」

「やうだつたか(なんで、空から降ってきたんじや?)」

「あのお

「なんじや?」

「こいつて入るのに条件とかあるんですか?」

「いや、こには来る者拒まずじや!」

まあ、知つてゐるけど、こわけおつね

「そうでしたか、よかつたあ」

「よかつたですね、お嬢様へへ

「うん、そうだね」

「それとそこにあるそやつはいつたい誰何じや?」

「あ、彼は私の執事のアキ・フュースという者です」

「初めてまして、アキ・フュースです、一応お嬢様の義兄といつ」と
ですので」

さて、マカロフ殿の反応はいかに

「ほつ！咲夜の義兄だつたのか。だが、何故執事なのだ？」

「元は執事とお嬢様の仲だつたんですよ。でも、私のお願いで義兄になつたんです」

「そうじゅつたか、そうだ、おぬし、魔法は何をつかうんじゅ？」

お、来たか魔法の話

「基本的に魔法は風の魔法と憑依の滅竜魔法です」

「なにつ、おぬし滅竜魔導士なのか！しかも、憑依とは
なんだつて？！お前滅竜魔導士なのか！」

あ、ナツだしかも、あんな遠くでよく聞こえたな

「あ、うんそうだけビ？」

「お前強いのか！」

「たぶん・・・」

「なら、俺と勝負しろ！」

お~お~お~どこの戦闘狂気なんだ

バトルジヤンキー

「そうじゅのう、力がどれくらいあるか確認しておきたいしの」

「ちよ、マスター！」

「いいじやないかやつてみたまえ

「エ、エルザさんまで・・・」

「がんばつてくださいお嬢様」

「ハア、しゃーないやるか」

そして、広場に出た

「ナツとやら、先攻後攻どっちがいいかえ？」

「新人であるお前に先攻を譲つてやるよ！」

「そうか、じゃあ注意しつくよ」

「ん？ 注意だと？」

「そう、注意ね。僕が使つのは魔法だけとは限らない」

「な、なんだつて！」

「ああ、お嬢様は本氣で勝負に行こうとしてますね」

「そうなのかアキ！」

「ええ、エルザ様もよく『見下さ』いね。お嬢様の能力をね」

「はじめえい！」

マカロフの合図で試合が始まつたのであった

「んじゃ早速やるか、まあ、最初は普通に魔法でね」

パンツ シュンツシュンツシュンツ

咲夜が手を叩いた瞬間勢いよくいくつかの風の刃がナツに向けて飛んで行つた

「おわっ、あっぶねえー」

「ありや、よけちゃつたか、ならー！」

パンツ バチバチ シャキン

咲夜は鍊成で槍を作つた

「槍を作つただと！？」

「おや、お嬢様はさつそく鍊金術を使いましたか、とこりひとは・・

・

「ふんつ、 槍なんかでどうなるってんだ！」

「第一イノセンス発動！」

シユインツ ピカツ

第一イノセンスである喉の部分が勢いよく光を放った

そして、光が消えた時、咲夜の首には十字に光るイノセンスがあった

「な、なんだそれは？」

「ナツは知らないだろうね、これはこの世界に無いからや」

「なんでこの世界に無いものをお前は持っているんだよ！」

「そんなの秘密に決まつてんだよ（笑）」

「音よメロディよ、この槍に纏い全てを絶つ刃となれ」

シユルルルルルル ? ? ? ? ?

どこからともなく音が聞こえその音はどんどん槍に集まつていった

「さて、ナツこれはうけきれる（笑）？」

「やつてやらあ！」

シユンシユンシユン ザシユウ

咲夜がすじに速さで槍を振り回しナツの腕に当たりナツの腕は負傷した

「うがつ！」
「ナツッ！」
「おいナツ！」
「「「大丈夫か！」」

周りからはナツを心配するこえがする

「危ないですよ、マスター」

「何故じゃアキよ？」

「今はいつもお嬢様じゃないですね」

「どういづ」とじや

「お嬢様は多重人格で、今は別のお嬢様が出でます」

「そうなのか！」

「このままでは、ナツさんが危険な田にあいますよ」「うむ、わかつた。では、やめえい！」

そして、アキの忠告により試合は終わりになつた
だが、もう一人の咲夜は満足いつておらず

「な、マスターまだ終わっちゃ いないぜ！」

「だが、お前さんとナツがこれ以上やつたら周りにも被害が大きい
し、おぬしはナツを殺してしまつだろう」「

「ちつ、ばれてたのかよ」

ザワザワ ザワザワザワ

今のは発言を聞き周りは騒いだ

「しゃーねえ、戻してやるか、イノセンス発動停止」

シユイン ばたつ

そうして、イノセンスの発動が止まつたと同時に咲夜は倒れた

「お嬢様！」

「咲夜！」

「新入り！」

「あ、これは寝ているだけのようですね。明日になれば会つた時と

同じお嬢様になるでしょ。」

「そうか、よかつたのぉ！」

こうして、ナツと咲夜の試合は幕をひいた

咲夜は寝てしまった後、アキがあとの事をいろいろやり広場の修復や家を立てたりなどいろいろやってフェアアリーテイルへ入った証のスタンプなども勝手に決めて押してもらっているのであった

「うわー、フェアリー・テイル？」（後書き）

ふう、着きましたね。最初はフェアリー・テイルの世界ですよ
さて、このあとの咲夜がどうなるか好きで期待を！

誤字脱字はご了承ください

一週間たつてるー? てか原作開始! (前書き)

咲夜「ちょっと、作者どうなってんのよ!修行とかはー」「作者」「めんどくさいから省いた。でも、大丈夫、ちゃんと使えるから」

咲夜「それ、信用できないんだけど・・・」「作者」・・・さあLet's GO!だよ

咲夜「ちょー作う・・・」

一週間たつてるー？でか原作開始！

チュンチュンチュン シヤツ

小鳥さえずる中カーテンを開ける音がした

「ふあ～、アキおはよ～」

「おはようござります。お嬢様、今田はもう原作開始日ですよ」

「ええええええ、嘘でしょ！！？」

「いいえ、嘘ではございません」

「やっぱ～、修行してないや。でも、イメージトレーニングしてるからいいか！」

「さあ、お嬢様はやく朝食を食べてフェアリー・テイルに行きましょう」

「わかつたわ！」

ガシャン ドタバタガタンッ ゴンッ いだつ！！

アキに着替えをまかせず自分で慌てながら着替え、机にぶつかりーの棚にあたりーのしながら

急いでフェアリー・テイルに行つたとさ

走つて数分後・・・

あ、あそこにエルザがいる！

「エルザ――――――！」

「おお！咲夜じゃないか！」

「一週間ぶり～って、その持つてるのは何？」

「ああ、これが討伐した魔物の角だ。地元の者が土産にと装飾を施してくれたんだ」

「へえ～、すごい大きい角だね！」

「そうだろう、私も今回は大変だつたよ」

私もS級試験通つたらエルザみたいな大きいの倒したいなあ

「咲夜みたいな者た」たら、S級は令機

エルザに褒められた？咲夜はここでS級になることを決意した
てか、アキ空気になつてないつすか？

あつた

サイドアウト

フェアリーテイル、ルーシィサイド

私ルーシイ、はいつたばかりの新人です
こうみえて星靈魔導士なのよ

余には家賃がやはりから仕事探さなきや
すぐ近くでは、火竜と呼ばれているナツとパンツー丁のグレイがい
つものよろにケンカをしてます

そんな時、

「大変だあ――――！」

急に口キが戻ってきて慌てていた

「エルザが咲夜とアキと一緒に帰ってきた！」

「「「「「な、なんだつてえ――――――?」」」

「うげつ!...?」

「さ、咲夜がきた、だと?...?」

あれ、急にナツの態度が・・・って震えだしてる!?

エルザさんは想像がつくけど、そんなに咲夜さんは怖いの?

それにもしても、ギルドが騒然としてきたわね

つて、あれ?

「エルザさんと咲夜さんって前にナツが言つていた?」

「今のフェアリー テイルでは最強女魔導士と最強最悪の女魔導士と言つてもいいと思つわ」

前にナツとグレイが言つていたけど。周りがこんなに怖がるつてことは、よっぽど怖い人達なのかな?

すると、

ズシッズシッズシッズシッ

なんか、人とは思えない足音が聞こえるんだけど

「エルザだ・・・」

「エルザの足音だ・・・」

「やつぱり帰つてきたんだ・・・?」

「このリアクション、やつぱりやつぱりエルザさんつてす」魔導士なんだ!」

すると私の想像で巨人のイメージが出てきてしまった

「怖つ!?つてあれ?」

私はふと思った。皆一人のこと怖がっているけど、私には咲夜さ

んの方は怖いと思えないくらいの年下だった

サイドアウト

はあよかつたあ。ちょうどエルザが帰ってきた所で、これで逃してたら気まずい空氣の中へ行くからね
それにしても、やっぱ皆エルザが怖いんだね（自分も怖がられて）
いるとわかつていな咲夜（）

「今戻った。マスターは居られるか？」

「綺麗だなあ！」

「おかえり。マスターは定例会よ」

「そうか」

周りを見るとなつとグレイが肩を組んでいた
なんで、あんな仲良しアピールすんのかわかんないわ？
しかも仲良しアピールなのが分からぬエルザもよく分かんないw

あ、ルーシィとミラさんだ

ルーシィとは初対面だね、ミラさんは見たときあるだけ
それにもしてもミラさん、情報だと昔は魔人と恐れられていたらしい
けど、2年前の事件で妹のリサーナちゃんを亡くして以来、性格服
装ともに一変してしまったらしくて正直びっくりよ
凶暴な性格から天然系看板娘つてのもびっくりだけど
すると、

「エルザさん・・・その馬鹿でかい角は何すか？」

あ、僕と同じ質問してるよw

「討伐した魔物の角だ。地元の者が土産こと装飾を施してくれてな
…迷惑か？」

「……………え、滅相もいぢりません！」「……………」

「あ、でもエルザそこに置いていやだめだよ」

「何故だ？」

「そこにあると通行の邪魔になるし、外に置いておいた方がいいね♪♪
「ふむ、それもそうだな。すまなかつたな咲夜」

（（（（なんで、そんな注意できんの咲夜／さん／ちゃん…！…？））
（（（（

）））の注意発言で、皆の心は一につになつた

「お前達！」

エルザの一言で皆がドキーン…としてしまつた

「旅の途中で噂を聞いた。フュアリー・テイルが、また問題ばかりを
起こしてくるとなー、マスターが許しても、私は許さんぞ！」

）））でいつものエルザの説教が始まつた…・・・と思つきや

「エルザ～、たまには説教やめてあげなよお

「む、だがしかしだな咲夜

「毎回帰つてくるたびに説教なんてしてたら、皆ストレスで倒れち
やうよお？」

「はっ、それもそうだな。なんで気づかなかつたんだ。私の失態だ
！殴つてくれ！」

「ううん、ハルザはそんな思考へ繋がるんだろ？」

（（（（（あたしても、咲夜ちゃん、ちゃんとこんな注意がよくできるねーーー。））））

またまた、咲夜の注意発言で皆の心が一つに・・・

「さて、ナツとグレイはいるか？」

「あー」

ハッピーが指が指を指した方向には、ナツとグレイが肩を組んでいた
ああ、そっか逃れたと思ったのに結局声かけられたからあんな風に
(笑)

「や・・・やあハルザ、おれ達・・・今日も仲良くなれてる。
・・せい」

「あ、い、」

「ナツがハッピーみたいになつた！？」

無理に仲良しアピールしなくてもねえ？
てか、なんでナツハッピーみたいな返事なのさ
それにルーシィ、つつこみのキレがいいね！

「そうか。時にはケンカをする事もあるだろ？が、私はやつて、仲良くしている所を見るのが好きだぞ」「いや、親友なんかじゃ・・・（小声で囁つてゐる）」「あ、い、」
「こんなナツ初めて見るわ！？」

ルーシイが妙だと思うのも多分しょうがない事だ

「ナツは昔、エルザにケンカをいぢんで、ボコボコにされちゃったのよ」

「あのナツが！？」

うん、情報によると瞬殺だつたよ」

「グレイは裸で歩いている所を見つかって、ボコボコに」

「口キはエルザを口説こうとして、ボッコボコ。自業自得だね」

「やつぱそーゆー人……」

その光景、想像できるね

「ちなみに、咲夜が怖がられるのはね」

え、僕つて怖がられてんの？

「ルーシイちゃんが来る一週間前にナツが咲夜と試合をして、咲夜の多重人格の中の一人が出てきて、魔法やらイノセンス？とかいうのを使ってナツが腕を怪我してしまって、そこでやめになつたの」「ええ！あのナツが腕を怪我しちやつたの！？」

え、マジでの人出できちゃつたの？だから、試合は嫌だつたんだよ。

しかもあの人ナツに怪我させてんのかよーつたく、後で注意しないと

「それとね。そのときの別人咲夜がマスターにあることを言われたの、しかもその咲夜の返答も驚きだつたわ」

『「Jのまま続けたらおぬしはナツを殺してしまっただろ?』

『ちつ、ばれてたか』

えええ、あの人僕の体使つてあんここまで言つてたの!?
はあ、こりやゝやばいな

もう一人の自分について唸り悩む咲夜であつた

「うひそおー?あの子も私と同じ新人さんなのにそんなに怖いなんて!」

そんなことがあつたなんて・・・完全に嫌われたかも・・・
そんなことをしている間にエルザが、原作に向けての話を始めた

「ナツ、グレイ、それから咲夜。頼みたいことがある」

「えつ!?」

「え、僕もなの?」

「仕事先でやつかいな話を耳にした。本来ならマスターの判断を仰ぐところだが、早期解決が望ましいと私は判断した。三人の力を貸してほしい。付いて来てくれるな?」

「・・・」

ナツとグレイは顔を見合せた

「まあ、僕は問題ないよ。ね、アキ?」

「ああ、そうですね。それにしても、やつと登場ですか・・・」

「ああ、ごめんね。いろいろやつてて気づかなかつたわ」

「よろしいですよ。多分後半になるにつれて消えていく存在ですか

ら(遠い目をしている)」

「ああああ、大丈夫だからね?だから、元気出してアキ!」

ああ、アキの元気がなくなつていぐ。どうしよう…
アキの様子に困り果てる咲夜であった

「どういつ事だ？」

「あのエルザが自分から誘うなんて…・・・」

「何事なんだ？」

周りがざわついた

「出発は明日だ。準備をしておけよ」

何故かナッシとグレイは睨み合つていた
そんな時にミリカさんは、

「エルザとナッシとグレイと咲夜、今まで想像した事無かつたけど・・・

・・・

「えつ？」

「これつて・・・フェアリー・テイル、最強の（最悪の）チームかも・
・・・

ミリカさんがそう呟いたのを聞いた

「よーし、いつなつたら、早速準備しなきゃねー。
「やつでござりますね。お嬢様急ぎましょー！」

そういうわけで僕とアキは即効で駆け出し準備の為にギルドを後に
した

やっぱ女子は荷物が多くなるものでしょ？

一週間たつてるー? てか原作開始! (後書き)

作者「なあ、咲夜ちゃんよ〜」

咲夜「作者僕の名前を気安く呼ぶな」

作者「ええ! ちよつとひどいよ。てか、この話完全に原作そつてる
よねえ〜」

咲夜「それは、作者が参考にするものがいけないんだってば」

作者「マジで! ? そつか・・・しゃーない、別のもん参考にすつか
咲夜」といつわけで、始まつたばかりですが、こんな作者をよろしくね

作者「おれっちからもよろしくね〜」

最強チーム集合（前書き）

作者「ふむ。さつそく大変な気がしてきたね！」

咲夜「なーにーが、「大変な気がしてきたね！」なんだよ！」

作者「だつてさ、チーム集合の時点でのいろいろ危険じゃん？」

咲夜「なんか、いろいろ分からぬけど。始めちゃおっ！」

作者「え、ちょっと咲夜さん？！」

咲夜「どうぞ、ご覧ください^_^」

作者「ちょ、ほんと、まつた。。。」

ルーシィサイド

ただいま、マグノリア駅に居ます
そして、田の前でナツとグレイがいつも様にケンカをしています
ミラさんに一人のケンカを止めてあげてと言わされて来ていますが、
一人のケンカを止めるなんて私にはとうていできません

「なんで、テメーなんかと一緒になんだよ」
「俺が知るかよ。エルザの助けなんて俺だけで十分なんだよ」
「じゃあお前だけで行けよ！俺は行きたくないねえ！！」
「じゃあ来んなよー後でエルザに殴られやん！」

どんどんケンカがヒートアップしてなかなか止めるなんて、できるわけ
ない・・・」めんないミラさん

「すまない・・・待たせたか？」

やつとエルザさんが来た。そう思い振り返ると

思わずつっこみを入れてしまった

ナツとグレイは、エルザが来たとたんすぐさま肩を組んで仲良じア
ピールする
また、ナツはハッピー化していた

サイドアウト

マグノリア駅構内

やっばい、やばすぎるわ。なんでこんな口にかぎって寝坊なのよ！

ただいまの、僕はマグノリア駅構内を走っている
せつからく、原作の開始で皆集まってる時なのに、寝坊だなんて！ア
キは情報収集で先に行かせてるし
全速力で家から走ってきていた。そして、前方を見ると大きな荷物
があつた
もうすぐで当たるところで僕はブレーキをかけた・・・だが、

「あ、やばい！止まれない！？」

キイーーーズルツ ドカンッ

結局止まれなくてエルザの荷物に突っ込んでしまった
すると、エルザ達の声が聞こえた

「な、なんだ今のは？」

「ちょ、エルザさん！咲夜が荷物にはまつてますよー？」

「なんだと！早く助けるんだ！」

さつきの突っ込みのおかげでエルザ達に気づいてもらえて、助かつた

そして、僕達は話始めた

「ふう、ん？君は確かフェアリー・テイルに居たな」

「新人のルーシィです。ミラさんに同行するよつて言わされて来ました。よろしくお願ひします」

「私はエルザだ」

「僕は咲夜だよ。すぐに呼んでいいからね」

僕も一応自己紹介をした

「ん？ 咲夜、今日はアキは来ないのか？」

「ああ、アキね。彼には先に行つて情報収集してもらつてる

「ほう。仕事がはやいな」

「一応、僕は情報屋が本職なんで・・・（小声で言つ）」

「え？ アキって誰なんですか？」

「あ！ そつか、ルーシィはまだアキに会つた事無いもんね

「で、誰なの？」

「アキは僕の執事なんだよお～」

「ええっ！ ？ 咲夜つてお嬢様なの！ ？」

なんで、あんなに反応するんだ？ ルーシィだって確かお嬢様なのに・
・

「それにしても、君がルーシィか？（チラツ）」「あ、い、さ～」「
傭兵ゴリラを小指一本で倒したというのは君の事か。」「はあつ！？」

「違うよエルザ。情報によるとオカマっぽいゴリラを・・・・・ブ
フツ・・・・お得意の星靈で・・・倒したんだつてさ

「（補正）ありがと咲夜。でも、なぜそこで笑う！ しかも倒したの
ナツだし！）」

「あと、貴族の屋敷に潜入捜査した時に、セクハラされて屋敷を全
壊させたっていうし「え、つ！？」

「それ程とは、力になってくれるならありがたい。よろしく頼む（
チラツ）」「あ、い、さ～」

「口、口チラ口ソ（色々と誤解だしね！？）」

「ありや、震えてるね。原作知識で知ってるけど。誰にも教えてもらえなかつたから、知らないって言つたのだけど苛めすぎた？」
ルーシィとの挨拶はこれくらいにして

「エルザ！付き合つてもいいが条件がある！」
「なんだ？言ってみろ」
「帰つてきたら、俺と勝負しろ！－！」
「ええつ！？」

ルーシィとハッピーが驚いた

「おい早まるな、死ぬ気か！？」
「前にやりあつた時とは違う！今の俺なら・・・お前に勝てる！それとお前もだ、咲夜！絶対に勝つてやるー！」
え～僕もなの？またあの人出ちゃうよ

「ふつ・・・確かにお前は成長した。私はしさか自信がないが・・・良いだろう、受けてたつ！だろ、咲夜？」
「はあ～、僕本人はいいけどさ。またあの人が出てきちゃうのが不安だな。」
「まあ、大丈夫だろう。ナツは頑丈だからな」
「そだね。グレイもついでにやつとく？」
「いや、やめとく。エルザに勝てる気しない咲夜とやつたら死にそう・・・」

さすがにあれを見たから遠慮したみたいだ

「うお～！燃えてきた～！～！」

天井に向けて火を吹くナツ

列車内

「うつふ・・・・・ハアハア」

「つたく、ちつきまでの威勢はどういった」

「毎度の事だけつらうね」

今、僕達は列車に乗っている。ナツは乗った途端に乗り物酔いでダウンしてゐる。今にも吐きそうな勢い

「まつたく。私の隣に來い」

「あ、い・・・」

「(どかなきやいけないのかな?)」

僕はナツと場所を交代した

「樂こしているよ

「あ、い・・・」

「ゴシ!?

「グハッ!?

「「「!」」」

エルザはナツの腹を殴つて、氣絶をせた

「これで、樂になるだろ?」

グレイは見てないフリをした
ルーシィはビックリしていた
エルザすげえ！、と関心している咲夜

「エルザそろそろ教えてよ。僕達なにすればいいのさ？」

鉄の森の事で簡単な説明をしたエルザ

ララバイのことも話していた。ララバイと叫び詳細不明の魔法で何かを企んでいるとのことだ
それを阻止するために、今回のメンツが集まつた
当然だが、エルザでも闇ギルド一つは厳しい
要約するところだ
あ、でも僕はがんばればできるかな？

話が区切られて、駅で昼御飯を買いに出た

「」飯を食べながらの会話中

「そういえば、ナツ以外の魔法は見たことがないわ」
「エルザの魔法は綺麗だよ。血がいっぱい出るんだ、相手の」「それって綺麗なの？」

僕も同感だよルーシィ。ハッピーそれは綺麗だとは言わないと思つよ

「咲夜の魔法はすごいんだよ！僕らの知らない魔法を使うんだ！」
「ハッピー達の知らない魔法つて、どんなのよ・・・」

ルーシィ、僕が危険な魔法を使うとでも思つてゐるのか？
でもまあ、あれだけは教えとくか

「えーっとですね。前回の試合の時に使つた魔法は一つだけなんだ
けどね（汗）」

「ええっ！？咲夜つて魔法以外も使えるって事！？」

「ハッピーの言うことが正しいね。僕は魔法以外のものが使えるよ
」

「ええええええええええ！」

僕の爆弾発言に皆が驚いた。てか、近所迷惑だよ？

すると、エルザがショートケーキを食べながら、グレイの魔法のこ
とを言つた。

てか、ナツをテーブル代わりにしちゃダメだよ

「私はグレイの魔法の方が綺麗だと思ひだ？」

「そうだね。見たこと無いけど」

「そつか？てか、咲夜見たこと無いのに同感するなよ

文句を言いながらもグレイが手を合わせると、氷で作られたフェア
リーテイルのマークが出来上がつていた

「わあ！？」

「氷の魔法さ」

「ああ、それであんた達仲が悪いのね」

「そうなのかな？」

「どうでもいいだろ」

オニバス駅

僕はエルザ達が鉄の森の奴らはまだここに居るのかという話を聞い
ている時に、ハッピーが何かに気づいた

アイゼンヴァルト

「あれ？ナツは？」

「「「えつー？」」「」

気づいた頃にはもう列車は、遠くなっていた
グレイとルーシィは畠然としていた

「話に夢中で忘れていた。何と言う事だ、あいつは乗り物に弱いといつのに、私の過失だ。とりあえず私を殴ってくれないか！」

エルザって違う意味でまじめだよね。それにしてもどうじよつか？
そんな風に悩んでいたら遠くにアキが見えた。そうだアキに頼んで
おこづ！

そんなことをしているとエルザが緊急レバーを引いて、列車を止めて
しまった

「仲間のためだ。解つてほしい」

「無茶言わないで下さい」

「私達の荷物をホテルまで頼む！」

「いやつ、なんで私が！？」

見知らぬ人に荷物預けたらだめだよエルザ・・・

「フェアリーテイルの人達って、やっぱしこいつ感じなのね・・・

「

否定できかねません・・・

「俺はまともだぞ」

グレイ・・・半裸で言つても説得力ないよ。「だから服はー?」ほ
らね

「よし、魔道四輪で追いかけるぞ!」

「あー、エルザ大丈夫だと思つよ~」

「何故だ咲夜?」

「さつきアキ見つけたから、助けに行くよう頼んだ」

「だが、電車に追いつく事なんてできるはずが無い!」

「それができるんだなあ。だってアキは普通じゃないもの（聞こえるか聞こえないかの声で言つ）」

「できるのか!? そうか。だが、心配だから行くだけ行こう!』

「つして、僕達は結局行くことにした

サイドアウト

列車内アキサイド

ふう、どうも皆様。執事のアキでござります

たつた今列車に追いつき乗り込んだ所にござります

お嬢様にナツさんをお助けるよう命じられましたが、ナツさんは・

・あ、居ました

そこで、ナツを見つけたアキだったがナツは戦闘中のようだった

「ナツさん、お迎えに來ましたよ!』

「ア、アキ・・・うつぶ・・・」

「誰だお前は？」

「あなたこそ誰なんですか？私はナツさんを迎えて来ただけですが。で」

「俺は鉄の森の一人だ！」

はて？鉄の森とは何でしたかね？聞いたときがあると想ひますが。
・・（アキも意外と忘れっぽいのであつた）

「まあ、どうでもいいですね。ナツさん歸さんが心配しているので
行きますよ」

「あ、い、・・・」

そして、私はナツさんを持って窓から飛び降りようとしたら、

「ちょっと待て！ハ工野郎、俺達鉄の森に手を出したこと後悔しあがれ！この先の駅で俺達は待っているからなー！」

「あっそうですか」

そう吐き捨てて、窓から飛び降りた。すると後ろの方からお嬢様達の乗った魔道四輪がやってきた。

それに気づいた私は、屋根にいたグレイさんとぶつかりそうになつたのでナツさんを放して、屋根に着地した

サイドアウト

数分後、僕達は列車に追いついた
すると、窓からナツを持ったアキが出てきた
しかしアキはグレイにぶつかると思つたようで、ナツを放して自分

は助かっていた

そしてナツはグレイとぶつかつた

「ノンッ！…！」

「「「うぎやああああああああああああ…!…!…」」

あ、ナツとグレイがぶつかつて落ちて…・・・え?

「ちよつ、ストップ！エルザストップだよ…」

そつして落ちた二人の元へ集まつた

「ナツさん無事ですか？」

「・・・あ、い。」

あ、無事?のようだ

「よくも、置いていったな!」

「『めんね。ナツの存在忘れてたからさ』

あんな風にぶつかつたのによく無傷だね

「無事でなによりだ」

エルザはナツを自分に引き寄せた

「いだつ！？」

鎧をしてくるから当然なぐらい、ガツンと音がした。エルザはいい

人なんだけどね（苦笑）

「まったく。無事ではありませんでしたよ」

「え？ アキ列車内で何かあったの？」

「確か、鉄の森とかいう人でしたよ」

「ばか者――――――！」

「ゴフッ！――？」

「そういうながらエルザはナツを殴っていた
うわあ、いつ見てもすごいね！」

「鉄の森は私達の追つている奴らだぞ。何故みすみす逃した！？」

「そんな、話しらねえよ！？」

「さつき話しただろう！人の話はちゃんと聞けっ――！」

「ブフッ・・・見てて笑えるねこの一人（笑）

「てか、それには無理があるよエルザ。気絶してたんだから（笑）」

僕は笑いながらつっこんだ

「そうだつたな・・・すまんナツ」

「つて、おい！俺殴られ損じゃねーか！」

どんまいナツ b (^ ^)

「そういえば。アキ、ナツその人特徴とかなかつた？」

「特徴だあ？」

「そうですねえ。特徴はありませんでしたが、妙な三つ田のドクロ
のような笛を持っていましたよ？」

「三つ目のドクロ?」

思い出したフリするか

「あっ! そりゃ!」

「どうしたんだ咲夜! ?」

「聞いたときあるから思い出したけど、わかつたんだよー・あれは死の魔法、呪歌の道具だよ!」

「なに? ! ?」

「その話、知ってる!」

「それはどうゆう物なんだ咲夜?」

「禁忌魔法の一つに、呪殺というのがあるのだけれど、ララバイはもつと恐ろしくて笛の音を聞くだけで死ぬと言われているわ」

「 「 「 「 なつ ! ! ? 」 」 」 」

「ついた名が、集団呪殺魔法ララバイ!」

ものすいぐ危険だと言い表している言ひ方をする咲夜

「集団・・・」

「呪殺魔法・・・」

「そんなもんが町の中で吹いちまつたら・・・」

「確実に死にますね・・・」

「冗談ではない! 鉄の森の奴らそんな物持出したら、何するかわからん! 直ぐに乗れ、追いかけるぞ!」

僕にはどうなるかわかるけどね

サイドアウト

最強チーム集合（後書き）

作者「ふう、危険な展開になってきたね！」

咲夜「ねえ、作者。このあと僕はどうなるの？」

作者「え、今教えたなら意味無いじゃん」

咲夜「それも、そうだね。んじや皆様。つまらないと思いませんが、

コメントお願いいたします」

作者「いろんな意味でお願いします！」

妖精は魔法壁の中（前書き）

作者「咲夜ちゃんオレッチすごい！」

咲夜「何が？」

作者「飽きっぽいオレッチが続いてる！」

咲夜「そうですかー（感情〇）」

作者「えっ、ちょっと、ひどくね！？」

咲夜「まあ、この調子でがんばる（と思つ・・・）作者ですので

作者「温かく見守ってください！」

妖精は魔法壁の中

クローバーの町 定例会会場 マカロフサイド

「マカロフちゃん。アンタんとこの魔導士ちゃんは、元氣があつていいわあ～」

フェアリー・テイルのマスター・マカロフに話しかけているのは青い天馬^{ベガサス}のマスター・ボブだ。マスター・ボブの服に何故羽がはえているのかは本人しか知らない事であつ。そして名前からして“男”である

「聞いたわよ～。どつかの権力者を、『テンパン』にしちゃったとか？」

「おお！新入りのルーシィじゃな？あいつはええぞお、モチモチボ^{ブルー}マコ^{トロ}ンじや～！」
「きや～、ヒツチ～」

マカロフのセクハラ発言に恥ずかしがるボブ

「笑つてる場合かあ～、マカロフよお
「ん？」

声の主は正規ギルドの一ツ、四つ首^{クワトロ}の番犬^{ケルベロス}のマスター・ゴールドマインである

「元氣があるのはいいが、テメエんとこはやりすぎなんだよ。評議員の中には、いつかフェアリー・テイルが町一つ潰すんじゃないかなって、心配している奴もいるらしきぞ」

「ゴールドマイൻが警告する

「一ヵホホ、潰されてみたのう。ルーシイのボーテーで
「もつだめよ、自分の所の魔導士ちやんに手を出しちゃ～

ひどいセクハラ発言のマカロフは放つておいて、ゴールドマイൻは更
につっこむ

「あのなあ、今じゃ評議員の連中はまだ新人の咲夜とアキの事も危
険視され始めてんだぞ」

「う、う～む・・・」

思案顔になり黙り込むマカロフ達

と、そこに青い鳥が割り込んできた。魔法の手紙を届ける魔法鳥で
ある

「マスター・マカロフ、マスター・マカロフ。ミラジーン様カラオ
手紙デス」

鳥が手紙を持ってきた

「マスター定例会お疲れ様です」

立体映像の手紙を開けると、ミラジーンが出てきた

「じゅじゅ、これが内の看板娘じゅ。めんこじゅうひ
「オオ～！」

「」

酔いながらも自慢するマカロフと集まるギルドマスター達

「実はマスターがいない間に、どうでもステキな事がありました」

「はお」

この後、ミラが笑顔でとんでもない事を言つてきた

「なんと、エルザが、あの咲夜とナツとグレイがチームを組んだんです。これって、フェアリー・テイル最強チームかと思うんです。一

「それでは」

ミラは一ツコリ笑つて、映像が途切れた

「あらわし」

一心配事が現実になりそうだなあ、オイ」

バタツと倒れるマカロフ

「（なんて事じや、奴らなら本当に町一つ潰したり、重体者を出し
かねん。定例会は今日終わるし、明日には帰れるが、それまで何も
起こらすにいてくれえつ！頼むう！－）」

マカロフの心の叫びが響いた

サイドアウト

クヌギ駅 崖の上

クヌギ駅で騒ぎがあつたようね。どうやらあいつら列車を乗つ取られたらしい

「馬車や船なら分かるけど、列車を乗つ取るなんて・・・」

「あい、レールの上しか走れないし、あんまりメリット無いよね」

「だが、スピードはある」

「列車を乗つ取るほどだし、何か急いでるみたいだね~」

「俺もそう思うな」

僕の意見に同意するグレイ、てか「何故脱ぐ!?」・・・僕が言うとしたのに言わないでよルーシイ

「まあ、軍隊も動いていることですし、捕まるのは時間の問題では?」

「そうだといいけどねえ~・・・」

そう言つて次の駅へ向かつた

ナツはいつものようにダウンしていた

僕は揺れのせいで頭を打ち気絶しました

オシバナ駅前

エルザに殴り起しこされた。えつ、なんで殴られたかって?

なんか、僕は普通に起こしても起きないらしい

そんなこんなで情報確認してみると、脱線事故と言つてているが、実は占拠されたようだ

すると、エルザが駅員の人訪ねていた

「君、駅内の様子は？」

「ん？なんだね君！」「ガンツ！」グウォ！？」

埒があかないと判断したのか、駅員に頭突きをかますエルザ
これを素でやつてから怖い・・・
見なかつたことにしようつと

だから、今聞こえてくる悲鳴みたいなのはただの幻聴にすぎない！

「アイゼンヴァルト
鉄の森は中だ！」

「おう！」

「よつしゃー！」

「てか、これあたしの役目！？」

ナツの事はスルーしました。僕達はオシバナ駅内に向かつた
ホームへ向かう途中に、軍の兵が全滅していたが今は無視して前に
進む

「やはり来たな、フェアリー・テイルのハエ共」

鉄の森が待ち受けていた

「貴様！貴様がエリゴールだな？」

はあ、もつすぐ戦闘になるのかあ。嫌だなあ～めんどいし（笑）

「ハエがあ！お前らの所為で、俺はエリゴールさんに・・・」

「（ん？この声は、どこかで聞いたような・・・？）」

「エリゴール、貴様等の目的はなんだ？ララバイで何をしようとしている！」

情報あるから僕はわかるけどね

「分からねえのか？駅には何がある？」

エリゴールは空中に飛んだ

「飛んだ！？」

「風の魔法だ！でも、咲夜も使えるよ！」

そしてエリーゴールは拡声器の上に降りた

「集団無差別呪殺をする気か！」

「違うよエルザ！これは、集団道連れ自殺だよ。聞けば死んでしまう呪殺魔法を響かせる場所に集まって、道連れ自殺を図かろうなんて、何を考えているんだ！」

「なつ、そうだったのか！エリゴール！自殺なんてせず、生きて罪をつぐなえ！」

「そうですエリゴールさん！ 罪を償えば、明るい未来が待ってるはずなんですかー！。 自暴自棄にならずに、ポジティブに生きるんですよ！」

アキとエルザが暴走しながら説得しようとしているが、何言つてんのこいつ等？

後ろの仲間や敵の皆まで、黙っている

「あれ？ 何でしょ、かこの疎外感・・・私達にか外したようですね」

さーと、そろそろ疑問を言いますかあ
すると、列車の時と同じような影が襲つてきたが、復活したナツが
防いだ

「てめえ！？」

「その声・・・やっぱりお前か！」

「ナイス復活！」

「そうだ。思い出しました！ 列車の中では会った人ですよ

「アキは今頃かいっ！」

「おー、なんかいっぽい居るじゃねえーか！」

「敵よ敵、みーんな敵だから！」

「へっ、面白そーじゃねーか！」

ナツが戦闘態勢に入った

「エリ、ゴール？ って人さあ」

「ああ？」

「ララバイ放送するのに、部下いぢや黙目やないの？ええ？・どうな
んだい？」

エリ、ゴールが焦った顔をした

「どういつ意味だ咲夜？」

グレイが疑問に思つたようで聞いてきた

「だつてさ。ララバイ聞くと死んじゃうのなら、部下達も聞いてしまえば生き残るのはエリゴールだけになるでしょう？」

「「「「あつー?」「」「」「?」

「??」

ナツだけは気づいていないようだ

「（な、なんだこいつは…？俺の目的がこの町じゃねえ事に気付きたやがったのか！？）」

咲夜の推測に、エリゴールは驚いていた。

「（こまではバレる可能性が…、こいつを先に片付けねえと…）

「それにこの先にはクローバーで、定例会場があるよ…・・・」

「ちつ・・・お前らやっちゃんえ！」

エリゴールは逃げていった

「じつちはフェアリー・テイル最強チームよ。覚悟しなさい…！」

「ナツ、グレイ…・二人で奴を追うんだ！」

後を、二人ほど追いかけていったが、あの一人なら大丈夫だろうナツとグレイは文句を垂れていたけどエルザに一喝されてハッピー化しながら走つていった

「お嬢様、私も皆様についていき情報を集めて参りましょつか？」
「ん~、いいや。どうせケンカしかしてなさそうな気がするからW
「わかりました。では、ここで観戦でもしています」

「よしつ、やべつと行きますかあ～」

向こうの奴らは人数で勝てると思つてゐるよつで、ハ工共を捻り潰してやるとか言つてる

「下劣な、これ以上フェアリー・テイルを侮辱してみろ！貴様達の明日は保障できんぞ！」

「…」
…
…
…
…

エルザが剣を出す

エルザ僕にも半分頂戴ね。 あの人があざしてゐるみたいだからさへ

「分かった。だが間違えて重傷者を出すなよ！」

剣を持ち、飛び出すと敵側も剣を持って襲つてくる。エルザは斧や双剣に武器を換装で変えながら、吹き飛ばしていく

「くそつー遠距離攻撃でもへりえー。」

—エルザ！

僕は前に出て一閃で相手の魔法を断ち切った

「第3イノセンス発動！」

そして僕は第3イノセンスの刀「醜鬼」
を発動して敵陣に突っ込んだ

で呂さのめしていく

「あれって魔法！？」

「いいえ。あれは魔法ではなくイノセンスという神に『えられた能力の物体を具現化された物です』」

「何それ！？」

「この世界の方々は誰も知らないでしょうね」

「ええっ！？」

アキは咲夜の事を言った

そうこうしている間に、エルザは槍、双剣、斧と次々換装していく

「二人ともすごいわ！？」

「でも、エルザと咲夜のすごい所はこれからだよ」

「エルザ？咲夜？」

鉄の森幹部の、カラッカが疑問に思つた

「しかし、まだこんなに居るのか・・・面倒だ、一掃するー」

「エルザ半分だからね～」

「分かつていい。換装！」

エルザの体が光り輝き、鎧が分解されていく

「おおっ、なんか鎧が剥がれてくー！」

ケダモノやん、あんた達よお・・・

「魔法剣士は通常、武器を換装しながら戦う」

「ですがエルザさんは、自分の能力を高める魔法の鎧も換装しながら戦う事ができるんです！」

「それが、エルザの魔法・・・」

「その名は……」
「ザ・ナイアード騎士！」

アキとハッピーが交互に説明していく、エルザは魔法の鎧、天輪の鎧に換装した

「舞え、剣達よ…」

エルザの周りに、多くの剣が現れた

「エルザアー！？」いつまさか！？
「サークル循環の剣！」

回転する多数の剣吹き飛ばされる鉄の森

「すう！？一撃で半分も全滅！？・・・でもちよつと忘れそう…」

「後はまかせる」

「ああ、やつてやらあ（笑）」

エルザは、元の鎧に戻った後、咲夜にバトンタッチした

「Jの野郎オー！」
「よくもやりやがったなー！」
「さあ、雑魚共さんよお、俺が今綺麗に消し去つてやるからな～（笑）」
「人格が変わった！？まさかこいつ…？」

またカラッカは気づいた

「さてと…・・・」

「――セリヤア――――――」

「危ないっ！？」

『醜鬼第1解放 醜戯の乱舞！』

その時、咲夜の四方八方へ醜い形をした光の線が舞つよう飛んで
いった

そして、その醜い光で敵は100m近く吹っ飛んだ

「きもつ！？てか、あの光は何！？」

「あれは先ほど言ったイノセンスの力ですよ」

「えつでも、すぐ気持ち悪いものだったよー？」

砂埃が消えるとそこに立っていたのは、奇妙な醜い形をしているが
どこか綺麗に見える刀を持った、いつもとは別人の様な咲夜が立つ
ていた

「えつ！あれは咲夜なの！？」

いつもと違う咲夜を見たルーシィは驚いていた。それもそのはず、
今の人格は人を傷つける事を楽しみ笑う、咲夜の中の人格なのだから

「ほらあ、早くかかっておいでよお～。じゃないと僕がつまらない
よ（笑）」

「く、くそお！」

「何者だ！あいつはいったい・・・」

今の一撃で、敵の半分だけだったのが4分の3もやられていた

「くそつ、オレ様が相手じやあ――――――」

ビアードは突つ込んで来た

「あははは、かわいそだだからやり方変えてやるよ。イノセンス発動停止・・・」

「まつたぐ、やりすぎだよ。致死武器スカーネック…」

「ウガア――――――！」

すると、突然ビアードの古傷が開き、痛みで叫びだした。そして、周りの残っていた奴らも叫んでいた
鉄の森の一人が、

「間違いねえ・・・」ハリハリアリーテイル最強最悪のコンビ・・・

・

よく致死武器受けて喋れるね？

戦闘中にどうでもいい事をのんきに考えていた咲夜

「妖精女王のエルザと多重人格たじゅうじんかくの魔王咲夜だ！」

「す」「おーい！」

「相手が悪すぎるー！」

カラッカは一目散に逃げていった。他の奴らは氣絶している

僕はエルザを先に向かわせて、オシバナ駅の修復をしてから行く事にした

やらなきゃ、なんか危険な気がするし・・・

「それにしても、直しても直しても穴があるのは何故？」

「誰かが直した所を、また壊しているのでは？」

そう、今僕は駅を直しているのだが、直しても何故か次にはもう六
が開いている

めんどくさいから、歩きながら直して回っていた
目的地にいたら、ナツが盛大に壁を壊す瞬間だった

やっぱしナツが原因だったのか・・・

エルザは、血を流し気絶中の男に追い打ちをかけている。
グレイは、内心穏やかとは言えなそうな顔をしている。
ルーシィは、茫然として暗い顔をしている。

「何この状況、ちょっと居たくないんだけど」

とりあえず、事情を聞き魔法壁のあるところまで行った

「うおおーすげっ。竜巻の中に居るみたいだね」

「そうですね。お嬢様はこうこうものが好きですものね^_^」

「のんきな話をしないで、咲夜はこれをどうにかできないのか
？」

「僕なりの方法は一つ、地面の下を通るか、大嘘つきで無かつた事
にするかね」
オールフィクション

地面の下ってよごれるから嫌だし、大嘘つきはへたすりや、建物全
部消えるからなあ

「地面の下を通る？あつー」

ハッピーが叫んだと思ったら、星靈の鍵をルーシィに渡した
能力による穴掘りで、魔風壁の下から抜け出す作戦を提案してきた。
ナツは、カゲヤマも外に連れ出そうとしている。ナツ優しいよ流石

主人公。

ルーシィの星靈のバルゴによって脱出した。外は魔法壁の風が凄かつた

「先を急ぐか」

「そうだね。急ぐつか」

エルザに同意するよつに答えた

「無理だな。今からじゃ間に合わない・・・俺達の勝ちだよ」

傷ついた体で、勝利宣言した

敵だけどめんどくさいから大嘘つきで直した。だが、逃げられると困るんで魂を半分憑依させて

僕が力ゲヤマの体の主導権を握っている

「ナツはどういった？」

シリアスになつていたら、ナツがいなくなつていた
ハッピーもないから、ついて行つたのだろう。なら、ラスボスを
主人公が倒して终わりか

今回の事件も终わりに近づいたのか。って、やばい、エリゴールで
遊ぼうと思ったのに！？

急いで行かなきゃ！

こうじて、エリゴールで遊ぶことを思い出した咲夜は、アキをつれて急いで追いかけたのでした

妖精は魔法壁の中（後書き）

作者「次回ララバイとの戦闘です」

咲夜「ララバイは強いのかな（笑）？」

作者「咲夜さんもしかして・・・あの人ガ！？」

咲夜「作者、ちょっとの間黙つとけよ（笑）」

ズシャツ

作者「ギヤアアアアアアアア・・・バタツ」

咲夜「あれ？ いつのまに作者が！？」

・・・・・

咲夜「まあ、作者のぶんも・・・ 次回もよろしくお願ひしますね^

^

エリゴールは変人？（前書き）

作者「すごい、ララバイ編まで来てもうた（ノ＼。＼）」

咲夜「ほんとビックリだわ。作者がここまで出来るとは・・・」

作者「なんか信じられないって顔してるね？」

咲夜「はあ、当たり前じやん。では、ララバイ編です」

作者「どうぞ、ご覧ください！」

エリゴールは変人？

クローバー大峡谷 クローバー町目の前

「もう少しでクローバーの町だ。待っている、ギルドマスターのじ
じいども！死神がばっ『いたあ————えいつ！』何つ！？ア
ベシッ！…」

エリゴールが咄嗟に後ろを向き、走りながら投げてきた咲夜の石が
綺麗に眉間に当たった

「やつと追いついた、エリエール！」
「エリゴールだ！！！」

お約束をしたので、バトルパートと行きますか！

「何故、貴様がここに居る？」
「エリーで遊ぼうと思つて（^_‐）d_」
「だから、俺はエリゴールだ！！」

またしても、お約束

「こいよ。その笛もお前も使えなくしてやるー…

（魔法壁は・・・カゲヤマジもほじりした・・・あと少しでじじい
どもの居る場所につくのに・・・！）

考えてるの丸見えだよ。一応ぼくはテレパシー持ってるから見え見え

「魔法壁は壊させてもらつたよ。いろいろ邪魔だつたしね？もしや
るならこれくらこやらなきや・・・」

僕は手の平に魔王印のマの文字を書いて、前にやったときより強く手を叩く

「いやんないかせね——」

そして、カマイタチのような刃が咲夜の後ろから数えきれないくらい飛んでいった

一
ぬあ！？

エリゴー^ルは数百m上空まで飛んだ

「そのまま上から逃げないでよ？」

僕は一瞬でエリゴールの目の前まで上がる

何文！？

そして鍊金術で作つた、切れない鎌が上下についた物を叩きつけた

そのまま一気に落ちて行つたので、僕もそれを追い地面に降り立つエリゴールも風で勢いを弱め降り立つ

（こいつ、一
体なにものなんだ！？）

「お前の仲間は多重人格の魔王って呼んでたけど？」

僕はそう言い放った瞬間、遠かつたので黒神ファンタムを使いエリゴールの目の前まで行き、致死武器でエリゴールの腹のあたりの古傷を開いた

「がああーー！」

そのまま100㍍近くほど吹っ飛んだ

「くそつ！暴風波！！ストームスラッシュガ」

「効かないよつ！」

僕はエリゴールの技に大嘘つきを使った

「何つー？！」

抹消

あの人をだせばすぐだが、遊びたいので出さない

「くそつー！ー！」

エリゴールは暴風衣ストームメイルを纏う

ものすごい暴風が流れてくるが何の支障もない

「死ねえーー！」

大量のカマイタチを放つ

「おお、危ないよ～これじゃあ避けきれないよ～」

そういうながら、大嘘つきでどんどん消していく

「避けてねえが消してんじゃねえか！～」

「ひこまないでHリゴール

僕は殺さない程度に、致死武器を調節して古傷を開いた

「がはつ！？」

エリゴールの暴風衣が解ける

「もう、飽きてきちやつた・・・」

僕は飽きてきたので第2イノセンスを発動した

「なんだこの光は？」

やつぱりこの世界には無いからエリゴールも不思議なんだね
そして、エリゴールの田を右の片田だけで5秒間見つめると突然エ
リゴールが叫んだ

「な、何故だ！？体がうごかねえ！？」

そう、今やったのは固定。第2イノセンスである両田のうちの右だ
けで見つめ続けると、固定されてしまつ力である

「エリゴール皆来るまで、変な格好で待つてな」

「なつー！おいつ早くこれ解きやがれ！」

エリゴールの叫びを聞いていた、後ろから誰かに呼ばれた

「「咲夜！！」」

振り向くと先に来ていたはずのナツとハッピーがいた

「あれ？一人とも先に来てたんじゃなかつたの？」

「それがよー、なんかの匂いで妨害されてあいつの匂いわからなく
てよお」

「あい、そのせいで僕ら迷っちゃって、今ついたところです！」

「ああー、どんまい。エリゴールは僕が遊んで片付けたよ。そここ
変な格好で固まつてるけど」

そして、ナツとハッピーはおおーといいながら、固まつているエリ
ゴールを叩いている

「本当にお嬢様はお遊びが好きでござりますね」

「あ、アキ。あなたなんでしょう？ナツ達の妨害をしたのわ」

「ええ。それに止めて置かないと、お嬢様の遊ぶ時間が無くなつて
しまうでしょ？？」

「それもそうだけど、一応主人公？なんだからや。来るだけ来なき
や駄目じやん」

「それは・・・失礼いたしました・・・」

謝るくらいなら、もうひとつ派手にやるつよ。って、考える事違
うかw

そんな他愛も無い話をしていると、後ろから魔道四輪がやってきた

「遅かつたね。もう終わっちゃったよお」

「そこに固まっているのはエリ'ゴールか？」

変な格好で固まっていたエリ'ゴールを不思議をそうに見つめるエルザ

「僕の能力で固定したの」

「つて、なんで固定？」

「誰もが思つていると思うが、僕はめんどくさがりだ！なので、めんどかつた！」

「そんなの知らないしつー？てか、エリ'ゴール悲惨・・・」

見るとわざとまでハッピーと叩いていたナツが、グレイと爆笑していた動けないから泣き出した

「ブフフ、エリー悲惨・・・ブフフ」

と、笑いながら言つたらブチッ！エリーじゃねえ！…といつ声がテレパシーを使って伝わってきた
キレながらつっこんできた

カゲヤマもエリ'ゴールの姿を見て爆笑していた

「少し可哀相な気がしてきた・・・」

エルザがエリ'ゴールに同情し始めた

「大丈夫だよ。これはリミッター付きで、評議員が触つたら解けるようになつてゐるから」

「そ、そうなのか・・・（咲夜は時々黒く見えるぞー？）」

「というわけで、評議院に送りつけるか！」

「それはおもしろいですね」

「いい案だな」

これはアキとグレイ

「あい、おもしろいです！」

ハッピーも賛同

皆ノリいいね

とか考えているとカゲヤマがララバイを持って逃げ出した

「笛はココだあーーーざまあ見ろーーー！」

そのまま魔道四輪に乗つてクローバーの方へ走り去つていった

「助けてあげたのに逃げるとか、めっちゃありえんていなんですか！」

「いえ、お嬢様は何もしていませんよ」

「それに、ありえんていつて何よ？」

アキヒルーシイにつつこまれた・・・というかルーシイなんか久し
ぶりな気が？

「とりあえず追う」

エルザに言われて僕達は追いかけた

サイドアウト

エリゴールは変人？（後書き）

作者「ララバイに行くはずだったのに・・・」

咲夜「大丈夫よ。もう一つ更新するからね！」

作者「あ、そうだった。では、もう一つ更新しますので！」

咲夜「ぜひ、見てくださいね^_^」

決闘ララバイ！（前書き）

作者「今度こそ、ララバイとの決闘だーい！」

咲夜「作者は、そんなにララバイ編が好きかい？」

作者「うん大好き。だってララバイが馬鹿っぽいから」

咲夜「でも、原作どおりなのかね？」

作者「えつ・・・？」

決闘ララバイ！

クローバー町 定例会会場の近く

クローバーに着き、急いでカゲを探すとマスターと向かい合っていた他の皆が行こうとすると青い天馬ブルベガサスのマスター・ボブが「今いい所だから黙つて見てなさい」と止められた
カゲとマスターの会話が聞こえる

「どうした？早くせんか」

「・・・」

「どうやらカゲは迷っているようだ

笛を吹くことに

「まあ」

エルザが止めに行こうとするが止められる

「・・・」

（吹けば・・・吹けばいいだけだ！）

受信感度でカゲの考へてる事が聞こえる

（それで全てが変わる！）

「何も変わらんよ」

マスターがカゲの心境を見透かすよつに言つ

「さすがだな・・・」

俺は聞こえないよう小さく咳く

カゲが動搖する

「なにも変わらんよ」

「！？」

「弱い人間は、いつまで経つても弱いまま。しかし、その全てが悪い
では無い！元々人間なんて弱い生き物じや。一人じゃ不安だからギ
ルドがある！仲間がいる！強く生きる為に寄り添い合つて歩いてい
く、不器用の者は人より多くの壁にぶつかるし、遠回りをするかも
しれん。しかし、明日を信じて踏み出せば、自ずと力は湧いてくる。
強く生きようと笑つていける。そんな笛に頼らずともな！」

一応、このシーンについては、原作知識があるから知つてたけど、
泣けるねり（；；）

見るとアキの坦いでいる変人が涙を流していた

カゲが笛を落とす

そして、

「参りました」

負けを認め頭を下げた

その途端エルザにナツ、グレイ、ルーシィ、ハッピーが一斉に飛び出す

「ぬおおおおおーーーお前ら何故こりこりーーー?」「さすがです!今の言葉田頭が熱くなりましたーーー!」

エルザがマスターを抱く
だが鎧をしているから

「いだつーーー」

といつよつになるわけで
ナツがほめながらマスターの頭をペチペチたたく
青い天馬のマスターはカゲをなんか可愛いと言つていろ

「はーい、マスター」

僕はマスターに話しかける

「おお、咲夜か。そして、アキも来ておつたか。
「マスター、お土産ですよ^ ^」

そして、アキがマスターの前にヒリゴールと言う名の変人を置いた

「咲夜、アキ、この変な格好をしているのは一体なんじゃ?」
「ヒリゴールと言う名の変人ですよお~
「ヒリゴール?あ、ほんとじや・・・しかも泣いておるし
「セツキのマスターの言葉に感動しちゃったみたいで」

とか話していると突然ララバイから煙が上がる

僕はいつたんエリ、「」ルを置いた

「『めんアキ。これ評議院に送りつけておいて
「わかりました。では・・・」

とりあえず、アキにまかせておく
そして、振り返った瞬間

『ドイツモコイツモ、根性ノネエ魔導士ダナア！』
「「「「「「「あつ！？」」「」「」「」「」「」「」

「なんか出た！？」

皆ララバイから出てきたものに驚いた

『モウ、我慢出来ン！ワシガ自ラ喰ラッテヤロウ！』

ララバイが、巨大な化け物へと正体を明かした。
つかやつぱ、知っているのと实物を見るのどじや全然違うな。

『貴様ラノ、魂ヲナア！』

『デカ過ぎーーー！？』

『そこ突っ込むの！？』

どうでもいいでしょそこは！

「何だこいつは！？」、「んなの知らないぞ！？」

「あ～ら大変」

「こいつは、ゼレフ書の悪魔だ！」

会場にいたギルドマスター達は、非難して行った。

「なんで笛から怪物が！？」

「あの怪物がララバイそのものなのさーつまり、生きた魔法！それが、ゼレフの魔法！」

「生きた魔法？」

「ゼレフって、あの大昔の！？」

「黒魔導士ゼレフ。魔法界の歴史上最も凶悪だつた魔導士。何百年も前の負の遺産が、今になつて姿を表すなんて！？」

とか言つてる内に、怪物ララバイが近づいてきた。

『サ～テ、ドイツノ魂カラ頂コウカナ～？』

「なんだと～！…なあ、魂つてうめえのか？」

「知るか！つか俺に聞くな！」

なんでその辺に食いつくのナツ？

ナツ達は、魂を喰つてやるの一言を聞いて魂つて美味しいのかと議論してシリアス壊してるし、三人で戦う気満々みたいだ。

「あれ？咲夜は戦わないの？」

「僕もう疲れたし、めんどくさいし」

「もう戦いたくないだけでしょ」

「そういう事だね。でも、安心してよ。いつでも、出れるようにしてあるからさ。危なかつたら、いつでも手助けできるから大丈夫だよ」

「よ

そんな会話の中戦いが始まって、エルザの騎士ザ・ナイターで切り刻み、グレイの氷で削られ、ナツの炎で焼かれてボコボコにされていくララバイは自身を鳴らそうとするが、戦闘で体に穴があき音が出な

かつた

「所詮、笛だもんね」

「散々引っ張つておいて、ださい・・・」

「落ちがついてよかつたんじゃね」

その後ララバイがギルドマスター達に炎で攻撃するもグレイに防がれ、ナツが炎を食べて三人同時攻撃でしてララバイは倒れたしかし、何故か解らないがララバイが起き上がり『喰つてやる、喰い尽してやる』と呟いているのだ

「なんだこいつは」

「さつき倒したはずだろー!?」

え、なにこのパターン原作になかったよねえー?
しうがない、やるかあ（笑）

「おめえらーこいつからは俺がやる。手出しすんじゃねえぞーーー！」

「や、やっぱいつー?」

「えつ?何がやっぱいのよー?」

「今夜はあの人だ!しかもやる気満々になつてるーーー!」

「嘘でしょーー?」

「出るぞ、多重人格の魔王の本当の力が・・・」

全員がこちらを見ている。これから俺が何をするかを・・・

『小娘オマエガ相手力、オマエノコウナ奴ガコノワシ一勝テルワケ
ナイ!』

「はつ、おめえーーで、俺に勝てると思つてんじやねえぞ、このクソ
笛がよーー!」

あいつらの前でこれをやりたくないが、しょうがな
までは練成からやるか・・・

パンツ バチバチ シャキンッ

咲夜は最初に練成で鎌を練成した
そして、次にやつたのは・・・

「イノセンス全発動最大解放!!」

「なつ、お嬢様それは危険すぎます!」

「何故だアキ?」

「イノセンスは寄生型だと、ただでさえイノセンス原石がそのまま
でつらいのに、それを二つも解放して・・・」

「そ、それは!!?」

「さらには装備型で制御されるとは言え、最大解放するなんて、危
険すぎるにも程があります!」

「なんて事だ!」

まったくアキの野郎よけいなこと言つなよな

「第1イノセンス 間のメロディの纏まどこ」

すると誰も聞いていられないような不吉な音が流れ出した

「な、なんだこの音は!..?
「頭が割れる!」

周りの皆やギルドマスター達は耳をふさいでいた

「第2イノセンス 閻のアイコンタクト 第3イノセンス 魔鬼劇の破壊」

そうして、僕はアイコンタクトで片目だつたのを左目も開きララバイを5秒間見つめたら、ララバイが黒く染まっていき、魔鬼が劇上で踊る人形のような感じで醜くなつていき破壊の波動を出し始めた

『小娘ガソンナ武器^{ダークダンス}テ倒セルト思ウナヨ!』
「くらえつ! 閻の踊り会!!」

最初に皆が攻撃していた物よりも数倍でかい閻の刃にメロディを纏わせて攻撃を放つたが、ララバイに避けられ後ろの山を2、3つほど消してしまった

一方地上では・・・

「手を出すなって言つてたけど、大丈夫なの・・・」「おいアキ! 咲夜が大丈夫って言つたんだろ?」「ええ、そうですが・・・」「なら、大丈夫だろ?」「俺は加勢するぞー! こんな面白い戦いを一人でやらせるか!」「待て、咲夜の攻撃に巻き込まれて消し去るぞ!..」

マカロフがナツを止めた

今ならリスクがほとんどなしに、あの攻撃ができるな

「絶対大丈夫! 絶対勝つ! もうあの人には出さないでやるからやへへ」

そして、地面に降り立ち。トンツトンツとはね始めたと思つたら突然すごい余波と共に咲夜は消えていて、気づいたらララバイの前

にいた。そう、咲夜は黒神ファンタムを使つたのだ

「めんどくさいから、これで終わりね」

そういうて大嘘つきを使ってララバイの存在を無かつたことにして、跡形もなく消し去ったのだ

「はあ、終わつたあ～」

こうして、ララバイとの戦いは終わった

「見事！」

「すみません！」

「つあ！」

「す、す」

すすい!これが...これが一々二万一千ルイの魔道士か!?

爆煙の中から姿を見せる咲夜

「さすが最強！超かつこい！」

一
あ
し
！

「エリ、ニヤ！」叫んでいた。

マスター、自分の事みたいに自慢しないでくれ

「まつ、経緯はよく分からんが、フェアリー・テイルには、借りが出
来ちまつたな」

来ちまゝたな

ふむ

「しかし、これは……」

マスター達は口噤んでいた。

「あつ…！？」

「んつ？あ、つ…！」

エルザと咲夜は後ろに向き、事の最悪さに気付いた。

「「ん？」」

ナツとグレイは後ろを向いた。

「「「「「「「「やつ過ぎじや———...」」」」」」」」

そう、先ほどの爆発で、定例会会場があつた場所は巨大な穴が空き、その周辺の山の一いつ三つが吹き飛んでいた。

「定例会の会場どこのか…！？」

「あい、山一いつ三つ消えてるよ」

「ありやま…」

マスターはしばらく呆けた後、白い何かが出た。

「あ、つ、マスター！？」

「何が出た！？」

「あつはは、見事にぶつ壊れちまつたな！」

笑いながら言づナツ。

唖然としているグレイヒルーシィ。

マスターの白い何かを追いかけているエルザ。
笑っているナツに文句を言うギルドマスター達。

「よーし、俺が捕まえてやる！」

お前には

「え？ あつそつか！」

マスター達総突つ込みだねナツ。

でかなんて、そんなホシテイへはなれるの？

たが、僕だけは他の人達が詣も氣にしてくれなかつたので、アキと二人で寂しく修復作業をしていた

サイドアウト

決闘ララバイ！（後書き）

な、長くなつた・・・さて、次回はなんだっけな？
ま、いいか。次回予告書かなれば原作知らない人は楽しみできる
と思うしね

新しく登場の魔法（技、能力など・・・）

黒神ファントム：めだかボックスの黒神めだかの使う技。一回やると余波によつて服がボロボロになる

闇の踊り会：^{ダークダンスパーティ}第1第2第3のイノセンスを全部発動し、最大解放して、合わせて放つ攻撃

第2イノセンスの固定：右目だけで相手の目を5秒間見つめると、相手は固まつてしまい動けなくなる

ナツ×エルザ そんでもって聖十大魔導！？（前書き）

作者「今日はナツとエルザが戦うね」

咲夜「ねえ、なんで聖十大魔導なの？」

作者「それはですねえ・・・」

咲夜「早く言つてよ」

作者「本文見てくれば解るよ！」

咲夜「ひどつ！？教えなさいよ！」

作者「知りたい方はどうぞ、『ご覧下さい』！」

ナツバヘルザそんでもつて聖十大魔導！？

マグノリア フェアリー テイル前

今、ギルドの前ではナツとエルザの戦いが始まるうとしていた
ちなみにエルザは、耐火能力のある鎧、炎帝の鎧になっていた

「はじめえつ！..」

マスターの命図と同時に、両者繰り出した

「だあああああ！..」

「ふつ！」

「つおおつー？」

しばらくの間、両者の攻防が続き共に一撃入れようとしたその時、
パ――――――ンとドラのような音がして振り向くと評議院の蛙
が来ていた

一人はピタッと動きが止まつた
音を出した蛙は前に出て名乗つた

「そこまでだ。全員その場を動くな。私は評議院の使者である！..」

「評議員！？」

「使者だつて！？」

「何でこんな所に！？」

「すげつ蛙だあ！」

「咲夜は驚くところが違つ！..」

レビィ達シャドウ・ギアが驚いた

そして、使者の蛙について驚く咲夜につっこむルーシー

「先日の鉄の森事件について、器物損害罪他、十一件の罪の容疑で、エルザ・スカーレットを逮捕する！」

一
え
ー
?
」

「なんだ？」

「そして、サクヤ・ランライは別件で評議院に呼び出しをされているので、至急来るように！」

「ええ、僕もなんかあるの！？」めんどくせー。うんざり

「いつてきま～す・・・アキはここにいなよお」

サイドアウト

アキサイド

お嬢様とエルザさんが評議院に行つてから、ギルド内はシーンと静まり返つていた

「出せ、俺をいいから出すか――――――」

この蝶つているトカゲこそ、姿を変えられたナツです

「何をしたんですかナツ？」

「アキ、あなた何処行つていたのよ? 一人が評議院に行つちやつたんだよ! ?」

「ええ、知っていますよ。見ていましたから」

「アキ、どうにかできないの？」

「無理です。例え評議院でも敵に回す」とは危険な事です」

「そんな・・・」

えつ？今まで何処に居たのかですか？もう少しで分かりますよ^_^
それからしばらくして・・・

「出せー、俺を出せー！「本当に出しても良こののか？」ドキッ！？」

トカゲナツの様子がおかしくなった
まあ、あれはナツさんではありますんし・・・

「どうしたナツ？急に元気が無くなつたな」

黙つてしまつたトカゲナツ？に、マスターは魔法をぶつけた
煙が上がるごと、そこに居たのはマカオさんだった

「マカオ！？」

「ええつー？」

またしても、シャドウ・ギアが驚いた

「何で――――――？」

ルーシイがつっこんだ
すると「マカオさんは、

「すまねえ、ナツには借りがあつてよ。ナツに見せかける為に、自

分からトカゲに変身したんだよ

「じゃあ、本物のナツは！？」

「

「まさか、エルザを追つて……」

「ああ、多分……」

「洒落になんねえぞー！あいつなら、評議會すり殴りやうだー。」

「全員黙つておれー！」

皆がマスターの方に向いた

「静かに結果を待てばよい！」

皆がシーンとなってしまった

するとその時、リクエストボードの後ろに置いてあった木像から、物音がした

「な、何だー？」

皆が注目する中、グレイが木像を割ると中から手足を縛られたナツ
が出てきた

「ナツー？」

「ナツー、ええつー？」

これは流石の監でも驚いた。裁判所に居るはずのナツがここにいる
のだから

「ナツー、せつかく俺がトカゲに化けてまでオマエを行かせたのに
いーーー？」

マカオさんのキャラがつかめなくなつてきましたね？

「何の話だよ？意味わかんねえ？」

「それはいつのセリフだよ。ナメエがなんでここん中にこんだよ?」

すると、かすかにだが笑い声が漏れた

「くつ・・・くくくつ・・・くはははは・・・
「「「「・・・・・」」」

全員がアキの方を見た

「まさか、アキお前か?」
「・・・ええ、お嬢様の命令で・・・」
「えー!?.じやあ、アキがナツを捕まえたの!?.」
「ちょっと待て、俺がいつアキに捕まつたんだ?」
「「「「はあ?」」」
「だつてお前、エルザと決闘して「俺はまだエルザと戦つてねーぞ
?」えつ!?.」

話が噛み合っていない状況になっている様子

「なんかしらねえーけど、エルザと戦つ前にアキが来て、何かと思
えば突然アッパーしてきて、めちゃくちゃはえーから防げなくて、
そのまま気絶して今起きたんだけ?」
「「「「えええつ!?.」」」

さつきまで気絶してた奴が、さつきエルザと戦つてたナツはと皿が
疑問に思つた。

だが、その答えはアキが答えた。

「先ほど、エルザさんと戦つていたのは、ナツのクローンですよ」
「「「「・・・・・ええええ!?.」」」

「ていう事は、最初からナツじゃないって事…？」

「そういう事ですね」

「やるのアキ」

「暢気なこと言つてる場合じゃないですよ。エルザはどうなるのよ！」

ルーシイが思いつきりつゝ「」んだ

「大丈夫ですよ。どうせ夕方には帰つてくるようですから。マスターもそれが分かっていて待つていいのでしょう？」

「そういう事じや」

「「「「「「？」？」？」」「」「」「」「」「」

夕方頃、エルザさんが戻ってきた

魔法界の秩序の為、形だけの逮捕といつ形だったといつよつで

「結局、形式だけの逮捕だつたなんてね。心配して損しちゃつた」「そりやか、力エルの使いだけに、すぐ「帰る」！」

「…さ…さすが…氷の魔導士…半端なく…寒い…」

一瞬、時が止まりそうでした

「んで、エルザと漢の勝負はどうなったんだよナツ…」

エルフマンは、なんでも漢つて付けますね

「そりやか！エルザ！勝負だ！」

「よせ、疲れてるんだ」

ナツは既に両手に炎を纏つて、エルザに殴りかかった。

「行くぞおお――――」

「やれやれ……」

エルザは、ナツに強烈なボディブローをきました。バタッと倒れるナツに対して、周りが爆笑した。

サイドアウト

評議院内　咲夜サイド

今僕は、何故か評議院に呼び出されて来ているところです
それにもしても、何でだ？僕なんもしてないよ？
評議会に着くとウルティアと出会った

「あ、ウルティアだあ～」

「あら、あなたは白黒情報屋じゃないの」

「お初うだね」

少しうれしかった。闇ギルドの奴らは僕の事を多重人格の魔王と言
うけど、ウルティアは白黒情報屋と呼んでくれた

「それでも、僕は何でここに呼ばれたんだい？」

「それは行ってみてからのお楽しみってものよ

ウルティアも一応、評議員だから知っているかと思い聞いてみたが、
楽しみだからと言つて教えてくれはしなかつた

別れる時に、これからよろしくねとか言われた。返し方が思いつかなかつた

奥へ進んで行くと、呼び出された扉の前に立つた
ここまで、空気になりながらも連れてきてくれた使者に、礼を言つてから一人で部屋に入つた。

序に、書類はすでに渡してある。

「ほんにちわー・踏さんーん！あつ、オーグさんほんにちわ」

何故か分からぬが、よく会つオーグさんはフレンドリーになりつつある

軽いあいさつをした後、本題に入った

「さて、サクヤ・ランライ！魔法評議員二ノ席オーグの名を持つて、
そなたに聖十大魔導の称号を『せうだいじゆだいまどり』える」

「え？ 今なんと？」

「聖十大魔導の称号を『える』る・・・」

「・・・ぬうあにいいいいいいい！？」

「なつ！？ そんなに驚く事か？」

「いえ、雰囲氣的に驚いてみました・・・テヘッ」

今の反応で、聞いていた者は全員ずつこけた

それにも、聖十大魔導に選ばれるとは・・・

それに伴い、現役の聖十大魔道の誰かと入れ替えるらしい。

報告は評議会がして、少ししたら世間に発表する。正式に発表されるまで、口外するなど止められた。

入れ替えによる戦闘はしないらしいが、問題は寧ろ名声や待遇の後に来る義務だ。中でも、評議会の特別指令が有つた場合は聞かなくてはいけなくなる…といつめんどくさい内容が盛り込まれていた。

「はあ、なんでこんな事になるんだか・・・」

溜め息吐きながら、この称号を受けることにした
そうして、帰ろうとしてエルザは大丈夫かと思い、そこら辺の使者
の人聞いてみたらもう帰つて行つたそうだった。 しうがないの
で一人寂しく歩いて帰つた

マグノリア ギルド前

数分間一人で歩いて帰つてきたら、突然眠気が襲つてきた。だが、
僕は夢のメモリーを持つているから、それは効かなかつた
そしてギルドに入ると、ミストガンが居た

「おお、ミストガンだ。はじめましてえ～」

「つー？お前は・・・何故俺の魔法で寝ていないので？」

「僕はあるメモリーを持っているから効かないよ それと、僕はサ
クヤ・ランライよろしく」

「そりだつたのか・・・「あ、お嬢様お帰りなさいませ」「なに？」

「んー、ただいま～」アキ、マスター」

「おお・・・帰つてきたか・・・咲夜」

「今、帰つてきたのっ」

「おい・・・アキ。お前はこいつの執事なのか？」

「ええ、そうですよミストガン」

「うええっ！？アキってば、ミストガンと知り合いー！？」

「ええ、お嬢様が一週間寝ている間にちょっとした旅へ出て行き途中で会いました、友達になる事ができました」

「いいなあ～、ずるいぞアキッ！」

何故か、アキとミストガンが友達なのを知つてずるいと言つ咲夜

「あの・・・すまないが、行かせてもらえないか?」

「ん~、僕と友達になつてくれるならいいよ。平行世界のジエラードラス」

ルさん」

「なにつ!~? 何故お前がそれを知つている!~?」

「それは秘密事項だよ。これは僕の本業だからわ・・・」

「まいい・・・行つてくる・・・」

「これ・・・眠りの魔法を・・・解かんか」

「伍、四、参、弐、壹」

カウントダウンが終わると同時にミストガンは外へ出て行き、皆が置き始めた

「こ.....この感じは」

「ミストガン」

「あんにゃる!~!」

「相変わらず強力な眠りの魔法だ」

「ミストガン?」

「フェアリー・テイル最強候補だよ」

「顔を見られたくないのか、依頼の時に眠りの魔法で眠らせて仕事を受けるんだ」

「だからマスター以外ミストガンの姿を見た事ないんだ」

「いや俺は見た事あるぜ!~」

2階から、ラクサスが出てきた。

「もう一人の最強候補だ」

「咲夜!お前も見てたよな」

何でこっちに振るんだよ・・・めんどくせえ

「そうだね、初めて見たけど。僕的には面白かったよ」

「咲夜も最近で、最強候補になった」

グレイが説明役になつてゐる・・・

「そういえば、お嬢様は何故評議院に呼ばれたのですか？」

「あー、それはね。僕を聖十大魔導士に選ばれたからでした！」

「…………ええ…………？」

僕が皆へそう報告したら驚きの声が四方八方から聞こえた
すると突然、

「ラクサス！俺と勝負しろ」

ナツが目を覚まし、勝負を挑んだ。

「さつきエルザに負けただろ」

「大体エルザや咲夜に、勝てねようじや俺には勝てねよ

「どうゆう意味だ」

エルザ怒りすぎだよ。事実は受け入れようよ。
ミストガンに、眠らされていた時点で負けだろ。

「俺が、フェアリー・テイル最強ってことだ」

「降りて来て勝負しろ」

「お前が上がつて来い」

「上等だ！」

そういうつて二階へ行こうとするナツ

「一階は駄目なの、しゃーない止めるか

「（ぼやつ）・・・ひざあたたか」

咲夜は異常の人心支配の言葉の重みでナツを床にへばりつけた

「俺と戦いたかったらここまで上がつてくるか、咲夜を倒すことだな」

「えつ…どうゆう事」

「前にも言つたけど、ナツは新人の僕に負けているんだよ？」

「あつ、そつか！」

とやつとつしていたら、結局マスターに止められた

夜、ギルド内

僕はアキとミラとカウンターのところでトランプをしていたら、ルーシィが来た

「ねえ咲夜、さつきマスターが言つてた、一階には上がりちゃいけないって、どういう意味なの？」

「ん？ そうだね…」

「まだ、ルーシィには早い話だけね」

「ミラさん！」

「ミラ、説明お願ひね」

咲夜が説明しようとしたら、ミラが来たから丸投げした。

「一階のリクエストボードには、一階と比べ物にならない位難しい

仕事が張つてあるの。S級のクヒストよ

「S級！？」

「一瞬の判断ミスが死を招く様な仕事よ。その分、報酬もいいけどね」

「へ～」

「S級の仕事は、マスターに認められた魔導士しか受けられないの。資格があるのは、ヒルザ、ミストガン、ラクサスを含めて、まだ5人しかいないのよ」

「咲夜なら結構早く上に行けるかもね」

「どーいう意味？」

わかる気もするが、まあ聞いておこう

「さつきラクサスが言つた事が本当ならミストガンの眠りの魔法が効かなかつたつてことでしょ？十分上にいく資格はあると思うけど」

「どーだろ？」

「って聞いてる？」

俺はいつの間にやらルーシイの愛玩精靈ブルーを触っていた

「聞いてる聞いてる」

「聞いてる態度には見えないんだけど……」

呆れられた

「ちやんと聞いているよ～」

ちなみに僕は基本マスターと「ちやん」ともタメ口だ

マスターはまあともかくとして
なぜか//ヒさんつてタメ口が聞き辛そつた雰囲気だけど、そんなの
は氣にしない

「ほんと、そんな雰囲氣もつてやつ」

ルーシイに雰囲氣について賛同された

「えー？そんな雰囲氣なんて持つてないよー」

//ヒさんキャラ変わった？

なんかガールズトークみたいになりそつたので先に退散
一応女子だが、そういうのは苦手なので、とりあえず家に帰つて寝
よつ・・・

ナツバヘルザそんでもって聖十大魔導！？（後書き）

作者「さあ、咲夜クン！君は聖十大魔導になつたよ！」

咲夜「おおっ！？すげえな、作者、今日はあなたの事尊敬してあげるよ！」

作者「やつたー、咲夜に尊敬されたやーーい！イーーヤツフウーー！」

咲夜「作者が壊れたつ！？」

作者は今だピーヒヤラなどと妙なことをしている

咲夜「作者が壊れたのでこれにて終わりです！下に魔法紹介しておきます！では、また次回に！」

新しい魔法（技、能力など）

クローン：誰かの細胞を少し抜き取り咲夜の作ったカプセルに入れると、短時間でうまれるようになる

人心支配・言葉の重み：めだかボックスの十二組の十二人の検体名・
創造の都城 サーティン パーティ
クリエイト みやこじょうあつと
王土の使う異常。真骨頂のその1である。電磁波による干渉で相手の身体を意のままに操る（「平伏せ」、「跪け」等の一語の動詞を多用する）

夢のメモリー：Dグレのノアロードのメモリー。夢の世界へ連れて行ったりなど、いろいろできる。この話ではミストガンの眠り魔法などは効かないようになつてている

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4710z/>

異世界情報屋になったぜ！

2011年12月21日22時52分発行